資　料

COVID-19 禍における老年看護学実習の取り組み
－院内の学習控室を活用した半日実習の教育的効果と課題－

Approaches in Gerontological Nursing Practice during the COVID-19 Pandemic

~The Educational Effects and Challenges of Half- day Training using the Learning Lounge in a Hospital~

三谷美江

Yoshie MITANI

旭川市立大学保健福祉学部保健看護学科

キーワード：COVID-19，老年看護学実習，教育的効果

Ⅰ．は　じ　め　に

2020 年初頭以降，COVID-19 は世界中に広がりパンデミック（世界的大流行）が宣言された[1]。日本においても感染者は増大し，政府は 2020 年４月から 2021 年９月の期間に多い地域では４回にわたり緊急事態宣言を発令した。これらの影響を受けて看護系大学では臨地実習の実施が困難となり，多くの大学では臨地実習に代わる様々な取り組みを行なってきた[2)3)]。2020 年度 COVID-19 に伴う看護学実習への影響調査によると，83.4％が実習時期や内容の変更[4]を報告しており，その中でも実習時間の短縮は全体の約７割を占めた[5]。

文部科学省の看護学実習ガイドライン[6]によると，臨地実習で学修することは，モデル・コア・カリキュラムに示された「看護系人材として求められる基本的な資質・能力」を育成することにつながり，対象者との関係性を築きながら，看護学の知識・技術・態度を統合し，個別性のある看護を実践できる能力を身に付けるよう指導することを明示している。このことからも，臨床現場に身を置き，臨地実習を経験することで習得できる技術経験のほかに，対象者との関わりから共感的理解などの知の経験を積み重ね，看護師に求められる看護実践能力を修得する必要がある。そのため，看護師育成を担う看護系大学において臨地実習の質の担保を図ることは看護実践能力と卒業時到達目標を達成するために極めて重要である。

今回，実習施設の看護部および実習指導者と検討を重ね，感染対策を講じた上で，病棟滞在時間の短縮を図り，院内の学習控室を活用した臨地実習を実施した。この取り組みに対する教育的効果と課題について報告する。

なお，使用した資料は作成者の許可を得て掲載している。

Ⅱ．操作的用語の定義

1）半日実習とは，実習グループ４～５名の学生を２つに分け，病棟と院内の学習控室を活用し，午前と午後で半日ずつ交代して行う臨地実習をいう。

2）臨地学内実習とは，本来，臨地で行う実習を臨地実習以外の場で教育代替として行う実習をいう。

Ⅲ．倫 理 的 配 慮

個人が特定されないよう配慮すると共に研究目的以外に使用しないこと，実習成績とは一切関係ない旨を口頭で伝え，了承を得た。

なお，本資料に関して開示すべき利益相反関連事項はなし。

Ⅳ．COVID-19 禍での実習の概要

1．老年看護学実習の概要

本学の老年看護学実習は，3 年次後期から 4 年次前期で実施される。COVID-19 の影響により，2021 年 3 年次最初のグループは見学実習，4 年次後半のグループは半日交代制の臨地実習を経験，それ以外の学生は臨地学内実習を代替実習として実施された。

2．老年看護学実習の目的

健康障害のある高齢者・家族を老年期の特徴をふまえて理解し，健康の回復・維持・促進（時には平穏な死）に向けて，対象者自身の持つ治癒力や強みを最大限に生かし，その人らしい生活をするための援助に必要な基礎的知識，技術，態度を学ぶ。さらに，対象者の目標達成に向けて社会資源の活用，保健・医療・福祉専門職との連携や看護の役割を学ぶことを目的とした。

なお，3 週間の実習期間や実習目標・目的は，COVID-19 禍前と変更せずに実習を行なうこととした。

3．COVID-19 禍での半日実習の実習形態と方法

1）感染対策

臨地の学生数を 3 名とし，三密を避け黙食を徹底して休憩室を使用した。感染対策にはアイシールドを使用して看護援助を実施した。カンファレンスは 15 分間以内で 5 名全員が参加した。

2）実習形態と方法

臨地実習では 1 グループ 5 名の学生を半日で入れ替え，学生 3 名は病棟，残り 2 名は院内の学習控室を活用して自主学習を行なった（表 1）。各学生が 1 名の患者を受け持ち，看護計画に基づき看護ケアを実践し，対象者の経過に合わせ看護過程を展開した。病棟で行われる他職種カンファレンスに参加し，チーム連携を学んだ。

教員は病棟において学生の実習指導のほか，午前と午後に学習控室にいる学生を対象に学習進行状況を確認した上で，実践した看護ケアへの看護過程の指導や相談対応，効果的な振り返りとなるための学修支援を行なった。

Ⅴ．COVID-19 禍での半日実習の取り組み

1．学生スケジュールと引き継ぎシートを活用した指導者との連携

学生スケジュールは実習到達目標に合わせて学生配置を調整した（表 1）。学生引継ぎシートには，臨床指導者と教員から各学生の指導内容を記載した。各学生の実習到達目標の達成度や指導の方向性を共有できるよう，学生の実習状況や成長度を可視化した（表 2）。

表 1　学生スケジュール（老年看護学実習）

○○大学 老年看護学実習 学生スケジュール

実習期間：　　年　月　日（ ）～　月　日（ ）

実習病棟：　　病棟　担当教員：　　※AM:午前中病棟，PM：午後病棟，1 日：1 日病棟

月															
日															
曜日	月	火	水	木	金	月	火	水	木	金	月	火	水	木	金
学生名	学内実習	AM	PM	AM	1 日	PM	AM	学内実習	PM	AM	1 日	PM	AM	PM	学内実習
○○○○				PM	AM	1 日				PM	AM	1 日			
○○○○		1 日	AM			PM	1 日		AM			PM	1 日	AM	
○○○○		PM	1 日	AM	PM	AM	PM		1 日	AM	PM	AM	PM	1 日	
○○○○			AM	1 日	PM				AM	1 日				AM	

※状況により変更する場合もございます。

表 2　学生引継ぎシート（臨床指導者が作成）

「学生引継ぎシート」

	月　日（　）	月　日（　）	月　日（　）	月　日（　）	月　日（　）
指導した事					
良かった事					
明日指導してほしい事（注意してほしい事）					
先生から					
その他					

2．学習控室を活用した半日実習

1）病棟実習

受け持ち患者の看護計画に基づいて看護ケアを実践し，コミュニケーションを図った。病棟では実習指導者が看護師モデルとなって看護を実践し，熟練の技術やその根拠を説明した。学生は見学に加え，幅広く看護実践を経験した。学生は指導や支援を受けながら実践を通して学び，教員や実習指導者は学生のレディネスを考慮し，段階を踏んで看護実践の達成度が高められるよう学修支援を行なった。

2）学習控室の活用

院内の学習控室では実践を振り返り，看護計画の修正を行なうなど，思考の整理に活用していた。学生らは，看護師のロールモデルから得た学びや自身の看護実践についてゆとりをもって振り返りができ，教員は学生の患者理解が深まるよう既習知識の活用や統合し

ていく方法を指導した。学生は学修支援を受けて看護上の課題を明確にし，計画を修正して記録の整理を行なった。学生同士で看護ケアを実施する場合には，患者の個別性や持てる力を活かしたケア実践に焦点を当てて話し合い，主体的に情報共有を行なった。

学習控室における自主学習では，学生個々の主体性を尊重し，学習すべき内容を自身で考え取り組んだ。しかし，自発的学習力の乏しい一部の学生は，教員の不在時間は自由時間と捉えて有効活用ができていない状況が散見された。

3）看護技術経験値の比較

看護技術経験値の比較では，臨地学内実習に比べて半日実習を経験した学生のほうが，技術経験値は上回っていた。臨床で行われている看護場面の参加により，ストレッチャーの移動や緊急時に協力を要請するなど，経験した内容も幅広い傾向を示した（図１．２）。

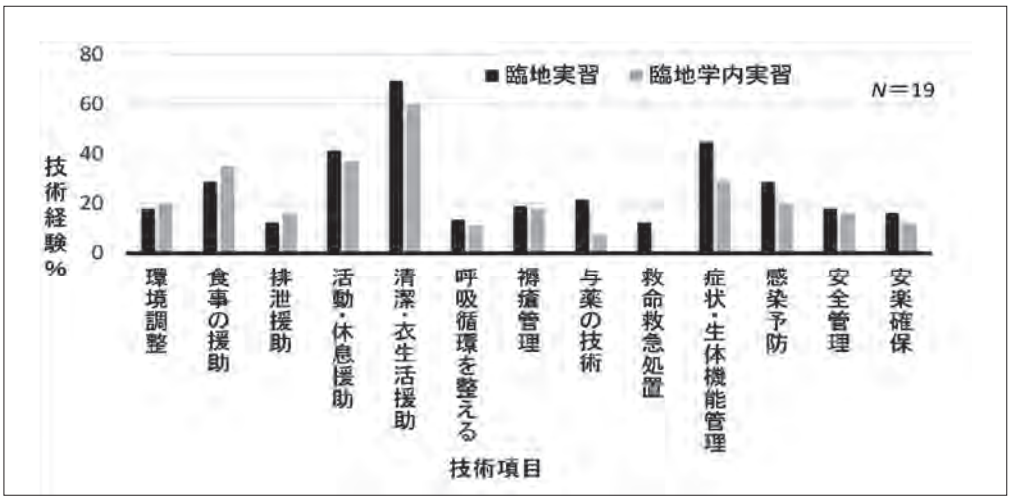

図１　半日実習と臨地学内実習における看護技術経験の比較（老年看護学実習）

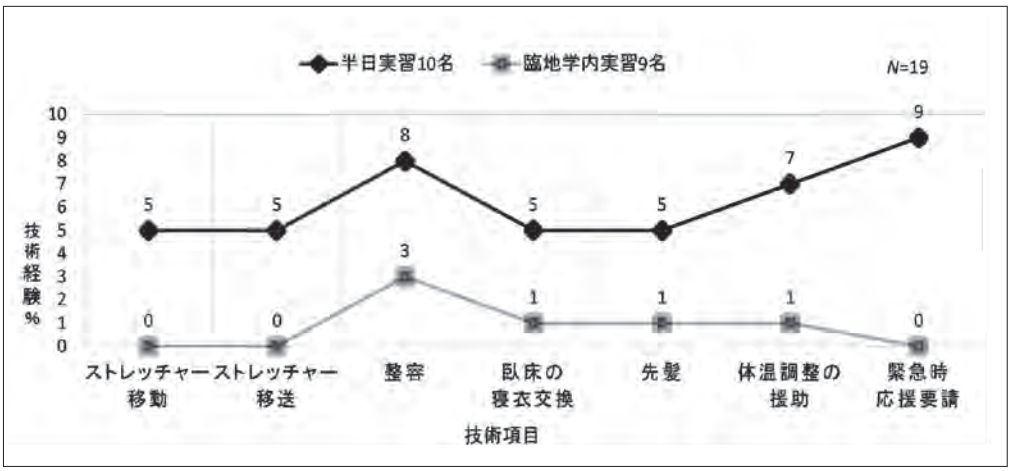

図２　半日実習と臨地学内実習における看護技術経験の比較（老年看護学実習）
技術項目で特に差が大きい項目

Ⅵ．考　　察

1．指導者との連携・協力

学生引継ぎシートの活用は，学生個々人のレディネスに合わせた効果的かつ継続的学修支援に役立っていた。文部科学省は臨地実習の在り方について，教員は実習の具体的な到達目標を明確にし，臨床指導者への説明を十分に行い，共有理解を得ておくことが不可欠である[7]と述べており，今回の学生引き継ぎシートの活用は臨床指導者から各学生に対する指導内容や理解度および課題を記載し，教員からは指導内容を記載することで臨床指導者との連携や協力を深め，実習到達目標の相互理解を得て実習指導に活用していた。

洞毛ら[8]は，学生指導者連絡表の導入について，実習指導者間の連携や実習レディネスに合わせた指導に有効であることを報告しているように，本領域で活用した学生引き継ぎシートでは，臨床指導者に加えて教員記入欄を設けたことでより共通理解を深めることにつながり、各学生の看護上の課題や到達目標および成長度を把握し，学生個々の指導目標を明確にした上でレディネスに合わせた効果的な指導を実施することに役立ったと考える。

学生はCOVID-19禍の影響により，患者を対象とした技術経験が乏しく緊張や不安を抱きやすいだけでなく，臨床現場では教員よりも臨床指導者とやり取りする機会が多い。教員と実習指導者との連携を密にすることは，学生の実習レディネスに合わせて継続的かつ一貫した指導のなかで学生は安心して実習に臨めることにつながり，このような教育に対する環境作りは過度な緊張や不安を和らげ，効果的な学修につながるものと考える。

2．学習控室の活用

控室を活用した半日の学習時間は，対象患者への実践の振り返りや計画修正に活かすなど，思考の整理に有効活用できていた。COVID-19禍において限られた臨地実習で学修効果を最大にするには，臨地実習前後の準備や振り返りの学修支援が有用である[9]ことからも，学習控室の活用は臨床現場で実践した看護ケアをタイムリーに振り返り，学生一人ひとりがゆとりをもって内省的観察を行い，実習時間内に看護過程の追加・修正が実施できたことは学修する上で効果的であったと考える。内省的観察とは，自身が経験したことを多様な視点かつ俯瞰的な立場から振り返ることである。学習控室は学生間や教員との対話から内省的観察を行い思考を整理する場となっており，そのうえ，タイムリーにリフレクションを行なうことは，PDCAサイクルを回転させながら対象に合った援助方法の理解を深め，結果的に自宅での学習負担の軽減にもつながったものと考える。

しかし，自主学習への取り組む姿勢が乏しい学生も存在した。受動的姿勢で主体性を育めていない学生には，学習進行状況や心理状況を確認しながら学習課題の優先順位を一緒に考えて思考を整理するなど，学習者の主体的な学びを引き出すような学修支援が必要であると考える。

3．看護技術経験値

遠藤ら[10]は，コロナ禍における実習形態の違いによる看護技術経験について，学内群に比べて臨地群は幅広く技術経験および見学ができていたと報告しているように，当領域実習でも臨地学内実習に比べて半日実習の方が看護技術を幅広く経験でき，経験回数も上回っていた。COVID-19禍に学内代替実習を行った教員は，実践の現場に身を置くことに価値を感じており，看護技術習得不足について懸念がある[11]と述べていることや，看護実践に不可欠な援助的人間関係形成能力や専門職者としての役割・責任は，緊張しながら学生自らが看護行為を行う過程で育まれていくものである[12]ことからも，臨地学内実習では状況設定や対象のリアルな反応を再現するのは難しく，学生が充分なアセスメントをする上での情報提供には限界があると考える。当領域の看護技術経験値で最も差があった，緊急時に応援や協力要請する機会は，臨場感のある現場であるからこそ，その必要性が増すと考える。それゆえ，チーム連携の実際や本当の意味での個別性を踏まえた看護実践は，実際に臨床現場に身を置き，看護支援を必要とする対象と関わり，経験を積み重ねることで看護実践能力が高まるのだと考える。半日実習では，実習指導者が看護師モデルとなって熟練の技術やその根拠を説明していた。文部科学省は臨地実習のあり方について，臨床実習は看護の方法について「知る」「わかる」段階から「使う」「実践できる」段階に到達させるために不可欠な過程である[13]と述べていることからも，現場で活躍する看護モデルを見て学び，体験によって知識と技術の統合を図るだけでなく，医療現場で必要な対人関係能力の育成や，より良い看護を探求する能力の育成も期待できると考える。技術経験としては，臨地学内実習よりも半日実習のほうが看護実践経験値が上回ったことからも，看護実践能力の修

得には臨床指導者の習熟した看護実践からの学びは不可欠であり，臨床実習での看護実践を通しての学びこそが，実践につながる臨地実習の教育的効果だと考える。

Ⅶ．ま　と　め

1．教育的効果があった点

1）学生引き継ぎシートの活用は臨床指導者と教員間の連携を深め，継続的かつ統一した指導となり，教育的効果を高めていた。

2）学習控室は，タイムリーにゆとりをもって看護実践を振り返り，学生が主体的に思考の整理や計画修正を行なうための場として有効活用できていた。

3）半日であっても臨地実習に参加することで，臨床現場において幅広く看護実践の経験ができていた。

2．今後の課題

1）学習控室の有効活用が困難であった学生が散見された。学生の主体性を促進させるための教員指導体制の検討。

Ⅷ．お　わ　り　に

COVID-19 は 5 類感染症に移行したものの，いまだに施設における感染対策に対する終息の目途は立っていない。今後も臨地実習への影響は続くもの考えられ，感染状況に応じた学修支援が求められる。そのためには，大学と臨床が充分に検討を重ね，教育の質を担保できるよう調整を図り，連携・協働して実習環境を整えていく必要がある。

最後に，本資料にご協力いただきました学生の皆さまに感謝申し上げます。

参考・引用文献

1） WHO：コロナウイルス病（COVID-19）．https://www.（閲覧日 2024.9）
2） 大森美穂：2022 コロナ禍における看護学生の臨地実習の代替え実習に関する文献検討帝京科学大学紀要，18，157-164，2022.
3） 日本看護系大学協議会看護学教育質向上委員会：2020 年度 COVID-19 に伴う看護学実習への影響調査　A 調査・B 調査報告書. https://www.janpu.or.jp/wp/wp-content/uploads/2021/04/covid-19cyousaAB.pdf（閲覧日 2024.8）
4） 同掲載 3)，3.
5） 文部科学省：新型コロナウイルス感染症下における看護系大学の臨地実習の在り方に関する有識者会議報告書看護系大学における臨地実習の教育の質の維持・向上について，令和3年6月8日．2021．https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/098/gaiyou/mext_00002.htm（閲覧日 2023.7）
6） 文部科学省：看護学実習ガイドライン，日本看護系大学協議会看護学教育向上委員会資料．8，令和元年 12 月 23 日．https://www.mext.go.jp/content/20200114-mxt_igaku-00126_1.pdf（閲覧日 2023.7）
7） 文部科学省　臨地実習指導体制と新卒者の支援　1．臨地実習の在り方 https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/018/gaiyou/020401c.htm（閲覧日 2023.7）
8） 洞毛初美，奥庭睦美：臨地実習指導に学生指導者連絡表を導入した効果について，日農医誌，69（2），177-182．2020.
9） 同掲載 5)，8.
10) 遠藤美穂子，伊藤茉莉子，黒木雅美，竹田理恵，二口尚美，小倉真紀他：コロナ禍の統合実習における実習形態の違いによる看護技術経験状況の現状と今後の課題，研究紀要青葉 Seiyo，13（1），25-36，2021.
11) 同掲載 3)，9.
12) 同掲載 7)，1.
13) 同掲載 7)，1.